

第 21 回研究会

2025 年 12 月 27 日

今回の研究会では、弘前大学教育学部 4 年の小川快都くんが、教育実習で行った研究授業について協議を行いました。小川くんは僕のゼミに所属しており、今回公開された研究授業も直接参観しました。その際、後日あらためて個別にフィードバックが欲しいと相談を受けたため、「それであれば英語指導法研究会で授業を公開し、僕だけでなく多くの先生方から助言をもらってはどうか」と提案したところ、「いいんですか！」と食い気味に快諾してくれました。

このやりとりからも分かるように、小川くんは入学当初から英語教員を志し、実直に学習と修練を積み重ねてきた学生のひとりです。紹介文にもある通り、これまで本英語指導法研究会をはじめ、青森県英語教育学会サマーセミナー、東北英語教育学会、教員向け研修会など、数多くの授業を観察してきました。さらに、模擬授業や教育実習での経験、実習先の指導教員からの助言を受けながら、授業を磨き上げてきました。

英語指導法研究会は、本来、現職教員の授業を公開していただき、それについて協議し、授業改善につなげることを目的とした勉強会です。そのため、教育実習生の授業を取り上げることには迷いもありました。しかし、これから英語教育を担う若手を育てるという意義、そして何より、生徒にまっすぐ向き合い、純粋に「授業をより良くしたい」と願う小川くんの姿勢から、経験を積んだ私たちにとっても学ぶことが多いと感じ、今回の公開に踏み切りました。

なお、今回は東京の授業研究会とのタイアップもあり、全国各地から合計 15 名の参加がありました。

授業者と授業について

①自己紹介

こんにちは。弘前大学教育学部 4 年の小川快都と申します。私が初めてこのスバルタンイングリッシュに参加したのは 3 年前です。その際に参観した授業があまりにも素晴らしい、指摘の 1 つも思い浮かばなかったのですが、そんな私を尻目に他の参加者の方々が盛んに意見を交わす文字通りの「スバルタ」にただただ圧倒されていたのを、つい昨日のことかのように覚えています。そこから「学生のうちからスバルタンに授業を提供できるほどの指導技術を身に付ける！」という目標を立て、がむしゃらに今年度の教育実習に取り組みました。結果として、なんとか佐藤先生からの GO サインをいただくことができ、今はとりあえずホッとしています。

②今回の授業について

対象学年: 1 年生

内容: NEW HORIZON English Course 2 Unit 7 An Online Tour of the U.K.

目標文法: 現在進行形（本時は主に疑問文）

③授業のねらいや工夫をしている点

•ねらい

本時の目標は、「教科書に出てくる2つのロンドンの観光名所どれか1つをレポートингすることができる」です。授業の流れは「ウォームアップ→オーラルイントロダクション→音読→ペアでのレポートинг練習→クラス全体にレポートинг」で、1時間で導入からレポートингまで持っていくというかなり力業の授業になっています。(加えて、授業中に機材トラブルに見舞われてしまい、やるはずだったNew wordsはまるごとカッとしたしました。これについての是非も伺いたいです。)

•工夫した点

- Small talkで話す題材をナチュラルに持っていくこと。
- Oral Introduction あえて丁寧に行い、英語のみの説明でもどんな内容かがイメージできるように心がけたこと。
- いつもは教科書の内容を生徒にリテリングさせて授業を締めることが大半なのですが、今回は教科書の内容の関係上、リテリングではなくレポートингという活動にしたこと。

•アドバイスが欲しい点

- リテリングを、「目的」ではなく「手段」にするにはどうすればいいのかを悩んでいます。特に今回は、レポートингが出来ればOKとしたため、目標文法である"Are you ~ing?"などにはほとんど触れませんでした。しかし、個人的には、リテリングを新出語・目標文法を定着させるための「手段」として位置づける視点も持ちたいと考えています。「理解した内容をアウトプットすること」、かつ「目標文法を使わせることで、生徒の注意をそれに向けること」をバランス良く行うには、どのような事前活動をして、どのようにリテリングをさせるべきかを、皆さんにお伺いしたいと思っています。
- 今回オーラルイントロダクションにじっくり時間を使いましたが、これだと「教科書を読む意味がない」と指摘されてしまうかもしれません。オーラルイントロダクションを短時間で済ませ、内容理解はNew wordsや音読で図ることが一般的な指導かと思いますが、それだと「なんかよくわかんないけど先生の真似して音読して、なんかよくわかんないけどキーワードを基にリテリングしている」という状況になりかねないか不安になり、今回このような手順を取りました。これについて、皆さんのが普段どのような指導をしており、その結果生徒の様子はどうであるかをお伺いしたいです。
- 機材トラブルに合った際にどのような対応、プランBの授業を考えているかをお伺いしたいです。
- ウォームアップの型が決まってきたのですが、なんとなくこの型に甘えてしまいそうなことに危機感も抱いています。皆さんがどのようなウォームアップを実践しているかをお伺いしたいです。
- その他、たとえ些細な事でもご指摘いただけると幸いです！

導入

(1) あいさつ & What day

- 教師にあいさつをし、質問に答える
- 今日は何の日であるかについて、教師の話を聞く
- ペアで1分間会話を継続する
- 教師と30秒会話を継続する

(2) B I N G O (5分)

- 単語を口頭で練習する。
- BINGOを行なう。
- ペアに"How many bingos did you get?"と尋ねる。

質疑応答

- 継続して行っている活動と、新たに導入した活動の双方について、生徒が徐々に慣れてきている様子が見られた。1週間以上の指導を経て、関係性も安定してきており良い傾向である。
- 「なんでそれをやるのか」という活動の目的を生徒が理解できるよう、授業の中で意識づけをしておくことが重要。例としてbingo活動について、単語練習を行うのであれば「文字を見て発話すること」を重視したい。ただ、教師の後にリピートするだけだと、音声をコピーしているだけになる可能性があるので、Word Flashなどのアプリを使ってスクリーンに投影して生徒に読ませてはどうか？または紙のフラッシュカードでもよい。
- 発音練習が単なるパロットになっていないかということがある。「オウム返し」にならないよう、文字と音を結びつける指導を意識してほしい。
- 実習期間は2週間と限られており、実習生の授業スタイルを押しつけすぎることは難しいが、良い実践は指導教官の先生がその後も引き継いでくれる可能性もある。
- 生徒の発話を促す雰囲気があつたし、教師の声かけも効果的で、学習環境として良いスタートが切れていると感じた。
- スモールトークの場面で、教師と生徒ではなく、生徒同士のやり取りをそのまま発表させる形の方が良いのではないか。元々、生徒同士が話していた内容をそのまま発表させたほうがいいのではないか？教師が聞き直して教師一生徒で再現する形でもよいが、生徒2名を立たせて再現させる、あるいはペアを変えて30秒程度で再演させるなど、複数の方法が考えられる。いずれの方法も「レポートティング（報告）」として成立する。
- 三单現の誤りを気にしていたようだが、導入直後であれば正確に言えなくても問題ない。スモールトークは三单現の定着を目的とした活動ではないため、通じれば十分と考えるべきで三单現は中学

校 3 年間かけたとしても完全定着は難しいため、現段階で過度に気にする必要はない。それよりも「話す場面がある」「通じたという経験が得られる」ことをコミュニケーションの一歩、またはひとつのスタイルとして教室のなかで普通の起こしておいてあげる。そして、そのうちもっとちゃんと言えるようになった方がいいよねと言う気持ちになったときに、直さざるを得なくなると思う。それよりも「しゃべる場面なんだな」というスタイルを早めに植え付けておいて、その後に生かしてあげること。この経験が積み重なることで、教科書の内容でも「隣の人と話してみよう」といった活動がいつでも自然にできるようになる。よって、現段階では形式よりもコミュニケーション経験の蓄積を優先してよい。

- 導入したばかりで使いこなせないからこそ、むしろ多く使わせることに意味があるという逆説的な観点が重要。

展 開

(1) Oral Introduction

教師が、教科書 Unit7 Part2 の内容を口頭で導入する。

(2) New words (5 分)

- Word flash を用いて、教科書本文の新出語や、生徒が躊躇そうな単語を練習する。
- Try to read
- Randomly
- Individually
- Flash

質疑応答

- オーラルイントロダクションがやや重く感じられた。この後に音読活動が控えていることを踏まえると、導入段階で全てを詳細に扱わなくてもよいのではないかという意見が多かった。具体案として、ロンドンと湖水地方の 2 つの例があるため、ロンドンについては丁寧に扱い、湖水地方については「どのようにになっているか読んでみよう」という問い合わせ程度でも十分ではないかという提案があった。
- 一方で、仙台や北海道の話題を取り入れたり、生徒の地元を例に挙げたりするなど、オーラルイントロダクションが非常に分かりやすく、良い工夫が多かったという評価もあった。
- 基本手順の丁寧さについて、オーラルイントロダクションの基本を忠実に実施しており、ここまで丁寧にできる実習生は少ない。自信を持ってよい！特に「This is～」に対して生徒が「That is～」と適切に言い換えていた点が印象的でした。これは事前に「教師から見れば this だが、生徒から見れば that」という指導を行っていたのか？
- (回答) パート 1 の授業でその指導を行っており、今回の授業では触れずに自然に出てきた。
- 指導手順の良さ

- ハンドサインを用いたリピート指示、全体練習→個別指名の流れ、単語→文の順での練習、バックアップリーディングなど、音読準備としての手順が非常に良かった。
- 一方で課題としてレポートингへの接続がある。教科書内容の音読準備としては丁寧で良いが、「レポートингをゴールとする」単元目標にどこまでつながるか疑問がある。例として、教師が別の場所についてレポートするモデルを示し、その後に教科書のロンドン紹介につなげるなど、自由なレポート活動への橋渡しが必要ではないか。
- 板書計画が非常に丁寧で、これだけしっかり板書計画が練られた授業は実習はもちろん現職でもなかなか見られないレベルである。
- 語研（英語教育研究会）型の授業を彷彿とさせる授業で、昔、長先生から教わった時に伊藤裕二さんとかね、山本良一さんとかの授業のビデオを散々見せられて、こうやって板書を完成しながら、生徒がいつの間にか教科書を全部読めるようになっていくようになるんだよと教えてもらった。しかもその時に全体でリピートさせ、その後、順番で一人ずつ何人か言わせてみる、ダブルリピテーションなど基礎的な指導技術がしっかり身についている（叩き込まれている）。語研型授業の大きな目標は「教科書本文を再現できるようにする」ことであり、今回の授業もそのステップとして非常に良い。教科書のリテリング（再現）は重要なステップだが、今回の授業の最終的に「自分の言葉でレポートする」という目標が掲げられている以上、教師が早い段階でレポートингのモデル（例：弘前城の写真の前で“This is … speaking.”）を示すことが有効ではないか。現状の授業では「教科書の再現」は見えているが、「自由なレポートинг」の目標はまだ提示されていないように見える。先生がイントロダクションとしてやることというのは、後で生徒がどこかで何かやる時に、あの時の先生を思い出してごらんというサンプルものなるはずである。そういう意味でいくと、今回のオーラルイントロダクションは教科書の本文を教科書見ないで、板書の写真の前で再現できるかっていうところまでは見えている。ただ、その教科書本文は、この後、自己表現するためのええステップなんだということ早いうちから見せておいて、ちょっとでもそういうことを試した子がいたらすごいよねって話にしていければいいと思う。
- 実習生とは思えない迫力と子どもの興味を引く授業だった。海外ニュースの生放送を見せてはどうか？
- 目標文型である進行形は教科書でどう扱われているか？
- （回答）教科書では、レポーター（ケイト）が紹介し、オンライン参加者が「What are those people doing?」と質問する場面で進行形が使われている。ただし、オーラルイントロダクションに自然に組み込むのは難しい構成になっている。
- 単元全体のゴールについてどういうものか？
(回答)「生徒がどこかの場所をレポートする」ことを単元ゴールとして想定していたが、実習期間の制約でパフォーマンステストまでは実施できなかった。
- 小川先生の授業を見て、アナログの板書のよさを改めて感じた。
- 現在進行形（ターゲット文法）をオーラルイントロダクションに導入すべきか？「オーラルイントロダクションに無理に入れる必要があるのか」「入れるならどうすべきか」？
- （回答）最終ゴールがレポートингでそこで生徒に現在進行形の文を言わせたいなら、教師がマイクをもって“I am reporting from …”などを繰り返し使い、自然に耳に入る形で提示するのが望ま

しい。ただ、教科書の進行形の使い方は不自然な箇所が多く、むしろ教師モデルの方が実用的。教師のモデルを真似することができるかできないかは生徒の選択にもよるが、教科書をリテリングするのが精一杯だという生徒にとっては、「本文しっかり覚えながらやりなさい」でも doing 使うことになるわけだから、それでもいいと思う。ただ、感覚的に今自分がなんかしてることを動作として見せられる、パフォーマンスできることを目指すとしたら、やっぱりちらっとでも出しておいて、先生が明示的にというか、何度も繰り返して、I am reporting from や I am speaking in London などの英文を耳にタコくらい本当何度も何度も繰り返して、なんとなく生徒がそれを真似してくれるっていうのが目標になった方が僕はいいと思う。

(3) 音読（10分） さまざまなバリエーションの音読を行なう。

- Chorus
- Overlapping
- Buzz
- Overlapping
- Individual
- Reading check

質疑応答

- 音読活動の際に英語のBGMと教科書本文の音声が流されていたが、その意図は何か？
- (回答) BGMは「2分間の活動時間を意識させるため」「他の生徒に聞かれるのが苦手な生徒への配慮」として使用した。教科書音声は、デジタル教科書の仕様上、マスリーディングを行うために再生する必要があった。ただし、BGMと音声が重なり雑然とした印象になった点は反省している。
- BGM自体は有効だが、教科書音声が流れると「自分の声を自分で聞く」というバズリーディングの目的が達成しづらくなる可能性がある。生徒によっては音声が負担になる場合もあるため、慎重な扱いが必要ではないか？
- オーラルリントロダクションが非常に丁寧だった一方、音読指導が急ぎ足に感じられた。“Lake District”や“appear”など、意味イメージが十分でないままリピートさせていたのではないか。練習回数が少ない段階でマスリーディングに移行していたように見える。公立中学校の現場では、文字と音の一致を丁寧に積み上げる必要があり、もう少し段階的な指導が望ましい。
- リーディングチェックを「センテンスごと」に行った理由は何か？
- (回答) 授業のテンポを優先した。前のユニットでも個別リーディングチェックを行っており、今回も同様の流れで実施した。多くの生徒に発話機会を与える意図もあったが、通じで読ませる方法も必要だったと反省している。
- 音読練習の基本方針について、音読練習の最終目標は「生徒が一人で本文を読めるようになること」である。家庭学習での音読（星読み）につなげるため、授業中に十分な回数を確保する必要がある。ものすごく単純に言うと音読練習は回数をこなせば身につく。でも、回数をこなすのは結構

大変で、だからこそ生徒が飽きないよう、オーバーラッピング、シャドーイング、マスリーディング、ルックアップリーディングなど多様な手法を組み合わせることが重要。つまり、結果的には生徒は同じことを生徒はぶつぶつ言っているだけ。それを手を変え品を変え回数をこなして、授業中に生徒がCDやQRコードのモデルに「自分で追いかけられる状態」まで引き上げておかないと、単元全体の積み重ねになっていかない。そういう意味で音読練習は、どこをターゲットにするかは先生の方で、その時間、生徒の様子見ながら決めることになるにしても、まだ読めてないなと思ったら、もっと読ませなきゃいけない。そういうことで行くと、授業中にかなり読ませなきゃいけない。そこを狙ったあの音読練習を、どうシステムを組み立てていってあげるのか。その上で、それに生徒をならしてあげるのがよいと思う。

- 個別に聞く体制は良いが、全体把握には20人前後のグループが理想。中基礎・中上水準の生徒を分けるなど、二形態指導も有効。
- 音読に時間をかけ、手法を変えながら取り組ませていた点は良かった。オーバーラッピングを2回行った意図について質問。オーバーラッピングは生徒が心の準備ができないように見えたので、掛け声や合図を入れるとさらに良い。
- (回答) 1回目: デジタル教科書の音声に合わせ、正しい発音についていけるか確認する目的。バズリーディングで個人練習を挟んだ後、2回目: 改善されたかを確認する目的で再度オーバーラッピングを実施。ただし、生徒に目的を明示できていなかった点は反省している。
- 個人練習中に本文が画面に表示されていたため、生徒が混乱しないか気になった。

(4) Reporting (14分)

教科書に登場するロンドンの観光名所のいずれか1つをレポートする。

- モデル提示
- 個人練習
- ペア練習
- 2、3人の生徒を指名して、クラス全体でレポート

質疑応答

- ペア活動の際、男女・女子男子などの組み合わせで順番に発表させていたが、ただ流すのではなく、生徒の様子を見ながら「中間指導」を入れる・言えていない部分をその場で補うといった介入があると良いのではないか
- リスナーが「ただ聞いているだけ」になっていたため、リアクションを取る、最後に褒め言葉を伝えるなど、聞き手としての役割を明確にする活動があると良い。
- 活動のレベルを上げる方法として、一文追加してみる・二文に挑戦させるといった声かけも有効ではないか
- 短時間で「教科書の音読 → リテリング → レポート」までスムーズに展開され、生徒も積極的に取り組んでいた。
- 教師がマイクを持って行ったレポートのモデル提示が非常に良かった。

- これをオーラルイントロダクションより先に提示した方が効果的だったのではないか
- 教科書の再現に寄りすぎると「暗記しなければならない」というメッセージになり、生徒の負担が増える可能性がある。→ 自由度を上げた方がハードルが下がり、レポーティングの本質に近づくのではないか。
- 最初の発表者が聴衆に「Do you like Harry Potter?」など、聴衆に向けた質問が自然に出ていた点が印象的だったため、このためにどのような指導をしたのか？
- (回答) 特別な指導はしていない。2時間前の授業でリテリングを行った際、「最後にナイスなエンディングをつけよう」と指導しており、それが生徒の中に残っていたのではないか。
- レポーティングのモデルが2パターン示された後、個人練習に入ったが、できる生徒にはもっと工夫を促してもよかったのではないか。
- ゴール(レポーティング)をもっと早い段階で提示した方が良い。
- ペア練習では、リアクションや「終わったペアが何をするか」を明確に指示すると良い。
- 挙手した生徒は頑張っていたが、2人目の生徒が自信を失っていたため、最後にフォローがあるとよかったです。
- 手の回数は生徒の自己評価に基づくのか？
- (回答) 基本は生徒の自己評価をもとに教師が判断し、拍手の回数を決めている。3回が標準、4回はかなり良いパフォーマンス、5回は特別な場合のみ。
- 「教科書の再現」と「自己表現」どちらを最終目標にするのかという根本的にどちらなのかがクリアではない。指導案を見ると自由に発表できることが最終目標となっている。そうなると、教科書を読ませて、それを使わせるということになっていくとハードルが高いのかという話になる。そうすると、生徒にとっては教科書の再現の方が難しい。なぜかというと、間違いがあるから。でも自己表現であれば間違いも含めて自己表現になるのではないかなどと思うので、やりやすいのは自己表現ではないかなと思う。だから、「教科書を読んで読めるようになって、覚えてやればそれらしい一応のことはできるよ。でもABCで言ったらBのレベルだよ。そこで、教科書にないこと、自分なりにえっと、どんどん発表できる方が、やっぱり目標としては高いじゃないのかなっていうことになっていく。でもそう教え込むというよりは、「生徒が、自分でまっさらなところで発表する方がハードルが低い」のだと生徒に分かってほしい。教科書の通りにやれと言われた方が困っちゃうなと感覚的に理解してほしい。この感覚が身についていくと、発表を怖がらなくなる。要するに失敗を怖がらない。「失敗怖がるな」・「怖がらせるな」・「間違いを恐れない」とかよく言うが、そのためには、しおちゅう間違いさせた方が慣れちゃう。反対に間違いの子を育てちゃうと、本当に1回の間違いでダメージ大きくなってしまう。では音読練習は何のためにやるかというと、「どこかをちゃんと使えばそれでいいんだから、100%再現する必要はないよ」という意味で、最後は理解させたいと思う。とはいってもペーパーテストを考えると、教科書の本文がちゃんと言えるか書けるかで合格するしない問題も出てきちゃうので、生徒にはなかなかわかりづらいのだけど、教室の中ではチャンスがあると思う。とパフォーマンスなのだから、先生もパフォーマンスの中で言い間違えながら体験させてあげる。そういうふうなところでいくと、この最後の目標の設定を、やちょっと高めのところに置いておいて、それに近づけさせるために、教科書の音読みたいな意味で、ああいうふうな、あのイントロダクションと音読練習は、えっと、しっかりやってあ

- 今日は教科書の読みみのところ前提にあったので、オールラインプロダクションが長いかなと気にされてたと思うが、リテリングに行く前に、レポートティングしている姿を先生が見せてあげたり、インタラクションあったりすると、サンプルの一つとして、教科書聞くところに持っていてあげて、徹底的に音読練習を必要な状況にしてあげて、そこで終わらないというふうにしておいた方が、この先、2年生、3年生になってた時には、きっと、いろんなことが思いがけないこと、どんどん出てくるんじゃないのかなと感じた。

全体的を通して

- 小川氏の授業で、生徒が発表者に対して「No」と答えた場面について、ふざけた「No」であれば扱いに注意が必要だが、本音としての「No」であれば、むしろ取り上げてやり取りを深めたい場面だったと感じた。「Yes でも No でもいい」という教室文化が重要で全員が同じ答えになる必要はなく、「Yes の人はどれくらい?」→「このクラスは Harry Potter 人気だね」といった扱いが自然なコミュニケーションにつながる。多様な反応を許容することが、英語でのやり取りの感覚を育てる。
- 小川氏がマイクを使ってレポートティングを行ったモデル提示が非常に印象的だった。今後も、教師自身が実際に体験したこと（海外での写真・動画・購入物など）を教材として提示すると、生徒の興味を強く引くはず。
- 実際に教師が行うレポートティングとしてマイクを持つだけでなく BGM をかけて行う以下のようなデモの例が提案された。
写真の前でマイクを持ち、
“This is John speaking from the Lake District.”
“Look, Peter Rabbit is running there.”
“Do you like Peter Rabbit?”
といった臨場感のあるモデルを示すことで、生徒が「教科書を読む」以上のイメージを持てる。
BGM や画像を組み合わせることで、ニュース風の雰囲気を作り、生徒のモチベーションを高める工夫があるとよい。

終わりに

今回の勉強会は、小川くんの授業を皆さんで見て学ぶことで、非常に貴重な機会となりました。休憩時間にも少し触れましたが、小川くんは実は柔道の達人で、オリンピック日本代表選手である齊藤立選手と試合をしたこともあるほどの実力者です。そんな彼が、まるで出稽古に来たかのような雰囲気でこの勉強会に臨んだと、冗談交じりに話してくれました。

僕の柔道の監督の言葉に「稽古で投げられて、試合で投げろ！」というものがあります。授業も同じで、勉強会でたくさん指摘を受けて、実際の授業で良いパフォーマンスをすることが大事なのだと思います。自分の授業についていろいろ言われる時は辛いこともあります、それを乗り越えない限り授業は上達しない、というのもまた事実です。

また、先ほど杉本先生がおっしゃったように、授業の基礎や基本がしっかりと身についているという点は、本当にその通りだと思います。たとえばダブルリクテーションは、私自身が長先生から教えていただいたものですし、また What day? は杉本先生が長年大切にされてきた指導法を、私が大学生に紹介して取り入れてもらっているものもあります。さらに、先ほど話題に出た拍手の活動については、田口先生が実践されているものを私が学び、そのまま学生に伝えている、いわば横流しのような形で仕込んでいるものです。

このように、私がこれまで先生方から教わってきたことを学生たちが受け継ぎ、自分の目の前の生徒や学校の状況、指導観に合わせてアレンジしながら授業をつくっていく。その循環が生まれているという意味で、この英語指導法研究会が果たしている役割は本当に大きいと感じています。今後も、参加人数が多い時も少ない時もあるとは思いますが、こうした機会を大切にしながら、皆で意見を交わし、授業が少しでも良くなるよう取り組んでいきたいと思っています。そしてその積み重ねが、最終的にはそれぞれの先生方が指導している生徒たちの学びに還元されていくことを目指しています。

今日はお忙しい中、また年明けで何かと慌ただしい時期にもかかわらず、小川くんのために多くの貴重なご意見をいただき、本当に感謝しています。最後になりますが、卒業論文の締め切りまであと 20 日という切迫した状況の中、それでもこうして授業を公開してくれた小川くんに、大きな拍手を送りたいと思います。本当にありがとうございました。

(文責) 佐藤 剛